

杉本順一*： 牧野標本館雑記 (12)

Jun'ichi SUGIMOTO*： Miscellany from Makino Herbarium (12)**

1) サラサドウダンの2新変種 サラサドウダンとその変種として知られるカイナソラサドウダン、ベニサラサドウダンおよびツクシドウダンの4品は分布区域もはっきり違ひ、花形とくに萼片の形や花冠の切れ込みの深さに差がある、通常明かに区別できる。とくに花糸の毛の長いものはベニサラサドウダン、ツクシドウダンの2品である。サラサドウダン(母種)とカイナソラサドウダンの花糸の毛は短小である。日光地方ではブナ帯にサラサドウダンを、その上の高い所にベニサラサドウダンを生ずる。そしてその中間地帶には花色、萼片の形および花糸の毛の長さに中間形を見ることがある。この4品の関係について別種説、変種説および亜種説と学者によって相違があるが、実際に互にこの4品は近縁のもので変種の関係にあると見るのが妥当であろう。

牧野標本館の標本中に葉と花が目立つて大形のものがある。その付箋に近江武奈岳産、ZT. 14.6.9と記入されている。田代善太郎氏の筆跡のように見えるので、同氏の夫人の手記された田代善太郎植物採集日記を見ると、田代善太郎氏が近江国大津から大正14年6月9日に比良山脈の武奈岳に登山採集の記録がある。この標本は花がよく着いた立派な標本である。葉は大きくて長さ4~6cm、幅2~3cm、葉柄の長さ8~12mm、花序も長く、軸は長さ6~8cmで10~15花を着けている。小花柄は長くて2~3cm、花冠は大きくて長さ13mm位ある。サラサドウダンの花の長さは乾燥標本で7~10mmであるから大きさが目立つ。花色は不明であるがサラサドウダンに似た色であろう。花糸にはベニサラサドウダンと同様に長い密毛をもっている。萼片は皮針状長楕円形で先は銳尖し、長さ4.2~4.8mmあって辺毛を疎生する。ベニサラサドウダンの萼片の線状皮針形や、サラサドウダンの皮針形で漸尖頭となり長さ約3mmに比べ差が明かである。サラサドウダンの1新変種としてオオサラサドウダンと命づる。

他の一品は牧野博士自身が伊予国石槌山で1938年に採集されたもので、2枚の花のついた良い標本がある。一見して各花序の花数が多くつくのが目立ち、17~23個の花がつく。花冠は小形で長さ6~7mm、花序の軸は長さ20~25mmで褐毛が多い。小花柄は5~11mm、萼片は小形で長楕円状皮針形又は皮針形で銳尖頭、長さ2.3~2.7mm、花糸の毛は長いものが密生するので、サラサドウダン(四国に未知)やカイナ

* 静岡県静岡市 [] Shizuoka, Shizuoka Pref.

** Contribution no. 21 from the Makino Herbarium of Tokyo Metropolitan University.

サラサドウダン（四国に多い、萼片は三角形で短い）と相違する。花色は不明である。葉は小形で質も薄く、長楕円形を呈し、長さ 15~27 mm 幅 7~12 mm ある。学名は牧野博士を記念して名づけ、和名は産地に因んでイシヅチドウダンと新称し、サラサドウダンの 1 变種とする。

1) *Tritomodon campanulatus* (Miq.) F. Maekawa var. *macranthus* Sugimoto, var. nov.

Folia obovato-oblonga basi attenuata apice acuta 4~6 cm longa 2~3 cm lata. Petioli 8~12 mm longi. Racemi 10~15-flori 6~8 cm longi, pedicellis 2~3 cm longis laxe pilosis. Lobi calycis lanceolato-oblongi acuminati 4.2~4.8 mm longi laxe ciliati. Corollae 12~13 mm longae. Filamenta villosa neque vero pubescentia.

Hab. Honshū: Mt. Bunagatake, Prov. Ohmi (Z. Tashiro, June 9, 1925)—holotype MAK 75090.

var. *Makinoi* Sugimoto, var. nov.

Folia parva tenuia oblonga basi attenuata apice acuta 15~27 mm longa 7~12 mm lata. Petioli 2.5~4 mm longi. Racemi 17~23-flori, rachides brunneopubescentes 2~2.5 cm longi: pedicelli laxe pilosi 5~11 mm longi. Lobi calycis oblongo-lanceolati vel lanceolati apice acuminati margine ciliati 2.3~2.7 mm longi. Corollae minores 6~7 mm longae. Filamenta villosa.

Hab. Shikoku: Mt. Ishizuchi, Prov. Iyo (T. Makino, 1938)—holotype MAK 75091.

2) ベニドウダンとチチブドウダン この 2 品は別種説、変種説又は区別しない説など、学者の見解の相違がある。シロドウダンとベニドウダンは花色だけの相違で品種以上の位には置けぬが、チチブドウダンは分布域も異なるし、花色が濃く、とくに萼片の形だけでも簡単に見分けられる。すなわちシロドウダンとベニドウダンの萼片は卵状三角形で鋭頭、長さは 2 mm 程であるが、チチブドウダンの萼片は長卵形で鋭尖頭、先が芒げに突出する。この種群のものはどれも花の大小の変異が著しく、同一場所に花の大きい株と小さい株が混生し、ときに同一株上にも大小の花が混生することがある。コベニドウダンとはベニドウダンの花の小さい個体への名である。

さて問題は学名である。ベニドウダンの学名の基になっている *Andromeda cernua* $\beta.$ *rubens* Maxim. の原標本产地は明かに箱根と記されている。箱根山および南関東から東海道地方にかけてはチチブドウダンを産するが、西日本にあるベニドウダンを見ない。従ってこの学名はチチブドウダンということになる。これを組み変えた *Tritomodon cernuus* var. *rubens* (Maxim.) Honda はチチブドウダンの学名に置き改めねばならない。するとベニドウダンには上記の学名を当ることが不可となるが、幸に *Enkianthus nipponicus* Palibin (1899) はこの植物を指すと思われる所以、これを移

した *Tritomodon cernuus* f. *nipponicus* (Palib.) Honda (1939) を用いる。前述の如く花の大小は区別にならないからである。

2) *Tritomodon cernuus* (Sieb. et Zucc.) Honda var. *cernuus*.

Sepals ovato-deltoid acute at the apex 2–2.5 mm long.

Distr. South western Honshû (Kinki & Chûgoku Distr.), Shikoku and Kiushû.

f. *cernuus*

Andromeda cernua (S. et Z.) Miq. α . *typica* Maxim. in Bull. Acad. St.-Pét. 18: 50 (1872), excl. pl. ex Hakone.

Flowers white.

f. *nipponicus* (Palib.) Honda, Nom. Pl. Jap. 521 (1939), s. amplific.

Enkianthus nipponicus Palibin in Scrip. Bot. Nort. Univ. Petrop. 15: 11 (1899–1900).

Meisteria cernua Sieb. et Zucc. f. *nipponica* (Palib.) Nakai, Tr. Shr. Jap. ed. 2, 195, f. 97 (1927).

Enkianthus cernuus (S. et Z.) Benth. et Hook. f. β . *rubens* Makino in Bot. Mag. Tokyo 8: (214) (1894), quoad pl.

Meisteria cernua var. *rubens* Nakai, Tr. Shr. Jap. ed. 1, 142 (1922); ed. 2, 193, f. 95 (1927); in Bot. Mag. Tokyo 38: 38 (1924), quoad pl.

Tritomodon cernuus var. *rubens* Honda, l.c. (1939)—Hara, Enum. Spermatoph. Jap. 1: 61 (1948), quoad pl.

Enkianthus cernuus Mak. f. *rubens* Ohwi, Fl. Jap. 904 (1953); ed. rev. 1042 (1965); ed. angl. 707 (1965), quoad pl.

Tritomodon cernuus f. *rubens* (Honda) Okuyama, Col. Ill. Pl. Jap. 1: 43 (1957), sub auct. Honda-Sugimoto, New Keys Jap. Tr. 384 (1961), comb. nud. et quoad pl.

Flowers more or less reddish 4–8 mm long.

var. *rubens* (Maxim.) Honda, Nom. Pl. Jap. 521 (1939), s. div.

Andromeda cernua (S. et Z.) Miq. β . *rubens* Maxim. in Bull. Acad. St.-Pét. 18: 50 (1872).

A. cernua α . *typica* Maxim., l.c., quoad pl. ex Hakone.

Meisteria Matsudai (Komatsu) Nakai, Tr. Shr. Jap. ed. 1, 144 (1922); ed. 2, 196, f. 98 (1927); in Bot. Mag. Tokyo 38: 38 (1924).

Tritomodon Matsudai (Komatsu) F. Maekawa in Nat. Sci. Mus. 7(2): 21 (1936)—Hara, Enum. Spermatoph. Jap. 1: 61 (1948).

Enkianthus cernuus var. *Matsudae* (Komatsu) Makino, Yagai Shokubutsu Zufu 295 (1941)—Ohwi, Fl. Jap. ed. rev. 1042 (1965); ed. angl. 707 (1965).

Tritomodon cernuus subsp. *Matsudai* (Komatsu) Sugimoto, New Keys Jap. Tr. 384, 477 (1961).

T. cernuus var. *Matsudai* (Komatsu) Sugimoto in Fl. Shizuoka Pref. 348 (1967).

Flowers blood-red. Sepals elongate ovate acuminate awn-tipped, about 3 mm long.

Distr. Central Honshū (Musashi to Settsu).

3) アブラツツジとコアブラツツジ この両品も別種説と変種説とある。両品の区別は萼片だけでは区別できない。しかし葉裏と花柄の毛の有無で明かに区別できる。すなわち葉裏と花柄に毛があるものはアブラツツジである。しかし花柄は秋深くなると脱毛することがあるが、葉裏の毛は晩秋まで残っている。葉裏と花柄に毛がないものはコアブラツツジである。両品は分布域も相違し、アブラツツジは東北地方から関東、甲信に分布し、コアブラツツジは静岡県以西近畿、四国まで分布する。ただ牧野標本館にある笠岡久彦氏が磐城国赤井岳で採集した一標本に限りコアブラツツジであって、奇異な分布である。

アブラツツジの萼片の形質には変異がなく、みな三角状卵形で先が急に鋭尖し、辺毛が著しい。だがコアブラツツジの萼片は相当変異がある。原品となった紀伊産品は記載によると萼片が鈍頭と記されている。この形の品は遠江、三河、紀伊に見る。牧野博士が紀伊の田辺で採集した標本に萼片の先が円形を呈する極端品がある。その他の標本では萼片がアブラツツジと同形で、背面に毛がなく、先端は鋭形を呈する。この形の品は磐城、遠江、三河、伊勢、土佐、伊予の標本を見た。コアブラツツジは從って大体三形を含むことになるが、これを命名の基準にすることは困難である。

3) *Tritomodon subsessilis* (Miq.) F. Maekawa var. *subsessilis*.

Leaves always pubescent beneath. Racemes pilose in blossom. Calyx-lobes deltoid-ovate abruptly tapering to the awn-like apex, densely ciliate on margins.

Distr. North to Central Honshū (Rikuzen to Suruga).

var. *nudipes* (Honda) Okuyama, Col. Ill. Pl. Jap. 2: 125 et in indice 18 (1960).

Enkianthus nudipes (Honda) Ohwi, Fl. Jap. 902 (1953), comb. nud.; ed. angl. 707 (1965), comb. nud.; in Bull. Nat. Sci. Mus. no. 33, 82 (1953). †

Tritomodon subsessilis subsp. *nudipes* (Honda) Sugimoto, New Keys Jap. Tr. 384, 477 (1961).

Leaves and racemes glabrous. Calyx-lobes variable in shape but roughly divided into following three forms.

form 1: calyx-lobes obtuse at the apex (Nomenclaturally typical form).

Distr. Honshū (Tōtōmi, Mikawa, Ise & Kii).

form 2: calyx-lobes acute at the apex (Common form).

Distr. Honshū (Iwaki, Tōtōmi, Mikawa & Ise), Shikoku (Tosa).

form 3: calyx-lobes rounded at the apex (Extreme form).

Distr. Honshū: Tanabe, Prov. Kii (T. Makino, 1924)—MAK 73653.

追記： 牧野標本館の標本を故檜山庫三氏に継いで見て行くことになった。御存命中に多大の御世話をなった牧野富太郎先生の梯を偲び、今後も上述の如き小文を記して、聊か旧恩に報いたいと思う。東京都立大学牧野標本館の水島正美博士には助言を頂いた。ここに深く感謝の意を表する。

○ネジバナとムカゴソウの学名 (原 寛) Hiroshi HARA: The correct names of Japanese *Spiranthes* and *Herminium*.

ネジバナの学名についてはこれまで色々な意見が出されてきたが、最近初島博士は北陸の植物 16(3): 80-81 (1968) で *Spiranthes lancea* (Thunb.) B. B. S. (1950) が正名であると記された。Raizada (1968) もまた同様なことを書いている。しかしこの学名は明らかに原資料の誤った同定に基いたもので、Vuijk が Blumea 11: 226-228 (1961) にこの点を詳しく解説している。この組合せの基になった *Ophrys lancea* Thunb. ex Swartz (1800) は Java 産で原記載特に唇弁の形およびウプサラにある基準標本を再検討した結果、それはネジバナでないばかりか全く異った群にはいるムカゴソウであることを明確にしている。

ネジバナには花穂の全く無毛なものがあり琉球や台湾にも分布し、それが *S. sinensis* (Pers.) Ames にあたることは私がすでに植物学雑誌 52: 659 (1938) で指摘した。Schlechter (1920) は *S. sinensis*, *S. australis*, *S. amoena* の 3 種を認め、Hand.-Mzt. (1936) は *S. sinensis*, *S. australis* の 2 種を区別したが、Ames (1924) はすべてを *S. sinensis* に統一した。

近年東南アジアからの豊富な資料が見られるようになると、日本でもこれらを同一種内の変異とみなす意見が多くなってきた。北村博士が植物分類地理 21: 23-24 (1964) にのべられたのはその代表的な見解であり、大井博士 (1965) は Ames と同じく種以下の区別も認められなかった。私は北村博士の考え方と大体同じであるが、ネジバナを下記の様に *S. sinensis* の地方変種として扱いたい。また今後他の性質による地方的変異を認める意見もでることが予測され、田中隆莊博士 (本誌 40: 68, 1965) によれ